



中村俊定文庫
文庫 18
546



一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
全



虫句合評判

三五夜中の新月の色くさまく貴財争異な
 リといへとも今宵の名高き月をなかめて思ひ
 をのべたのしき心は千さとも同じ光なりけり
 さればおもふこと言出すべきことの葉の文字
 の教さへたどくくて唯いたつらに老ぬれ
 は我にひとさ友とともなく侘^わし草のよほ
 をには露おとなふ人としていなけれは明月に
 来て相照らす独^{どく}坐^ざしひとりこちて長く嘯^{せう}きく
 せなき月を仰ぎつゝかたみく影を惜めども更



No.

(大東京文具チエーン特製)

行 露 空 の つ れ な さ を う ら 紫 の 萩 の 下 露 し ん く
 と 一 て 萩 の 上 ぶ く そ よ ぎ も な く 静 夜 の 清 光 霜
 に ま か ん て 地 に 敷 く と い へ ど も は う は め 庭 の
 露 み か く 打 し ほ 水 た 日 千 草 が れ と に て い と か
 す か な る 音 に た て し も の つ お や く や う に そ 有
 け 了 其 声 怨 了 が 如 く 又 暮 ぶ か の と し か れ ば
 す た く し の に や と 羨 子 に 端 疔 し 侍 了 に え ぬ
 い 八 れ め 匂 の し て 萩 根 垣 の も と よ う ひ と つ の
 出 這 出 たり 月 の 夜 が け に す か し 足 小 水 登 へ び
 リ と い ぶ 出 だ て も あり け 了 又 木 陰 草 が 根 よ

(大東京文具チエーン特製)

敷 く の 出 び も い で 来 り て と こ に は つ と ひ め
 い づ れ も す か た い お せ き も の た 小 水 登 へ び
 こ 音 を 出 す こ と も あ 了 に や と 伺 居 た 了 に へ び
 リ が 声 と し て 扱 七 こ よ ひ く ま あ き 空 の け し き
 に む か し を 忍 び て 月 八 な が め し か た み そ と あ
 リ し ぶ 了 こ と を お も へ ば へ ば へ ば へ ば へ ば へ ば
 こ 草 の 袂 を め う 侍 の 下 け ば い に へ ば 侍 加
 と も が ぶ 彼 長 嘯 翁 の 庭 に 遊 び て 哥 を 作 り 萩 本
 の 基 礎 を 判 者 と 扱 い 十五 番 の 哥 合 と 居 せ へ ば 長
 嘯 翁 字 に す 下 び 玉 び し 程 子 紋 号 と 居 せ へ ば 哥 よ み

とて今の世に其名を殊せし其中に之は蛇カマ蟻カサか
 こといふ今の序も書きたるものなればいふ
 も更え又蝶は海やましく花に戯れ量はあのか
 思ひにこれ朽ちぬ鈴虫さりすハ鳴きの
 あいれを水心とて多く歌人の詠にもよすべ
 小がさる事し侍り一其外せりいとまゝる
 毛虫草出けいハ蠅ハ蚊ハにいたる迄に其時の
 哥合に教まらうて世に哥よこの名をしら
 たりはいかたうやすしかうぬかハ水バカ
 いらハすみ所口いしくて哥人の庭の草あし

(大東京文具子エーン特製)

ろ敷島ののげに寄りしハおのづからなる
 3べ一物お天にありとかやたれば及びあき身
 のこ水とうやみて何かせんさハいへど我
 も又天地の一物しハわげせし生しやをうけて月
 花のたのしさをしらす物の情も哀れ知らず
 朽ちろんは無下なりと云んば身をあきらあり
 さハ思へどもかゝるつたなき身にハあれはた
 とす哥人の庭にせにはいもよるべきたよりし
 なくうたよあすはこをハしらすとせめて似
 合のほいかねの茶匂をりて今宵の月を詠ある

思ひをのべて心を慰人と思ふるめんくはいか
 におほすやうんと云りかば教くの由りも頭
 をあげておれそにほせを捨石の下塵塚のほ
 とりにかく小位を又いかなる時乳かけ出た
 をこぼかたなく屁をひり散うし傍着無束の不
 了まひたす心とさこそと思ひくたし侍りし
 にげに放屁木訥ハ仁に迫りとあやうくし
 きこえ玉ふとのかおわれしと魂のあすに
 しかるすきこそは思ひ侍るべしと未練の
 ことたれは言葉の流す役もつあかとりし何か

(大東家文具子エーン特製)

たにやはりのよしあしいとすかかくすか
 を發するの一句を吟じて世の笑ひをいと
 めんと云げると同じ心の友かすをすねく
 の體に申しすいさの葉うさうくこころ晴
 たるこの光にありあて面しのやさしきこ
 ろざしを聞ていと有かたくおほえ侍るさう
 とここの思ひあふ彼哥合のためしをひき
 ちるてこゝろえたるんを判者とす又三
 五夜中の教にならひて十五番の句合となし
 へかしと云ければ石龍子の曰びうちに判者

性情

晴吟

をと云ふは豆に緯逆の事なりありて夜七ふけ
 時ころつりぬべし瀧にしのして判者を送りし
 よとありけり水ハ壁虎^{べりり}出て瀧の河汰ハ我等の取
 扱ふわざなれば我にまかせらばよとて禁^{わさ}すべ
 の塵をとりにてさきをおしゆかめ候^ことやうん
 口のうちにて呪^{まじ}しと候^こうなく候^こをもした
 りしに氣^{へん}勢^うが^かかたにを^あお^ける^に判者
 に極^{きま}りた^とく案^あ返^への^につ^かわ^よと^すめ
 うれこへひりいあむに詞なくとわお^とく
 上^上段^段になをりたるふせい志やくくさくそ^そえ^えけ^ける。

(大東京文具チエーン特製)

十五番句合

判者

唯^い黙^し病^と一^い氣^き禁^{きん}

一番

左持

うた人のちん^{ちん}し^しつか^{つか}なる月尺哉

地虫

右

草の戸やしらりて嬉^嬉きけふの月 壁虎

○○○

左大和歌ハ人の心をたぬとてよろづのこと

の葉とをぢりけりとかや侍のよえ氏句を巻

の初めは出さずたの原の^一素や委島の

送あきくけく月と名高き^一鏡の松風は通^一と

影の音階の声も用へず
 静たのたかしのなかに
 影さす月日の走もひと
 ときい子やひやかに足ゆ
 るとよや初やすうかに
 風懐ゆかしく又依るの
 名もあゆまげなうす
 用へてさやゆき日足の一
 句といふよし
 右 読茅か穂の軒端
 ありてハ日帯位の燈を
 照らす
 才一々今宵の月のくま
 あす影のまゝ来ると
 珠
 更に娘一とやゆげに
 あか人の独あゆゆく
 月足
 の風懐浅きす
 用へ侍りたハ後徳大寺殿の哥
 の同のやうに思ひハ
 右ハ心やすきと思ひ
 かに

(大東京文具子エーニ特製)

せうかー 西行上人のいけり
 のやうにて
 小を何かよも 中がた
 其う(依る)地おと
 かしりとの中 舟水ハ
 ありて 持とて 中へ
 二香 左勝
 名月や今に さい奇麗
 いなこあうささ
 冬は斯
 女形かたつふり
 隠して月足かな
 蛸牛
 左 紫式部のめぐり
 あかての哥の詞書には
 やう
 よりわらハ友だち
 に侍りりる人の年
 比へて行

逢^たの^かほ^のか^よて^ふつ^き十^の比^月よ^きほ^ひ
 こ^の侍^りけ^いは^とあり^て月^よ人^を論^へて^よ
 ま^し哥^きや^うと^ん其^は一^句た^い
 け^たか^き女^をと^いふ^つ又^初つ^かひ^はた^いか^内
 儀^はと^古人^の言^し口^印の^あく^さの^色の^あかり^り
 と^あり^て中^あし^く伺^へ侍^り
 右^唐上^よこ^い中^の繁^んく^あり^て足^へた^りひ
 む^てい^みじ^さ帽^子の^あと^はい^いど^し人^目を^忍
 お^のり^は日^中出^して^花橋^の歌^限す^袖髪^をゆ^か
 む^てい^は遠^くは^澤之^近く^は浪^川中^家な^とい^は
 け^しき^あかり^しく^い伺^へ侍^りと^小集^の清^らなる^こ
 い^又た^いひ^ル内^儀と^思ひ^小侍^り
 三^番左
 五^もし^かな^くて^かた^ふく^月見^かな
 螺^亡觚
 右^勝
 わ^ふと^いふ^浦も^やま^かも^けふ^の月^河蚶
 左^最中^の秋^の月^のな^かめ^に一^句を^案い^て心^を
 な^やま^すと^にや^詞を^かが^らす^突体^の一^句と^い
 ふ^づ

(大東原文具子エーニ特製)

し^きし^のな^りか^いの^風情^して^忍ゆ^めに^月足^る
 け^しき^あかり^しく^い伺^へ侍^りと^小集^の清^らなる^こ
 い^又た^いひ^ル内^儀と^思ひ^小侍^り
 三^番左
 五^もし^かな^くて^かた^ふく^月見^かな
 螺^亡觚
 右^勝
 わ^ふと^いふ^浦も^やま^かも^けふ^の月^河蚶
 左^最中^の秋^の月^のな^かめ^に一^句を^案い^て心^を
 な^やま^すと^にや^詞を^かが^らす^突体^の一^句と^い
 ふ^づ

右にしほたれつゝ他を住み浦山里のくまばら
 近に名月のさやかなるハ都に同じ光な小はと
 こけふの月とかけたるは古風めきて捨かたし
 又興は花は足ぬ里にありとちけん古人の心を
 もしたひたるかとおもへばともゆかしくて
 右を勝とす

四番 左持

名月の出たうやたてな不破名古屋 茶卓

葩久も西はとつちに月見かな

西他知

(大東京文具子エーニ特製)

左 月のまはくまふきに能者笠をまふかにか
 ぶりまともいいたや白柄の大小さし七名はふ
 不破名古屋が丹前寄のあたりの実いかめしく
 包一ぬべし雲に輪舞三本傘今宵はいとふさ
 舟小共月はいくまふきをのみ足るもつめはと言
 し古人の物好きをいたいて何處なる羽織を気
 と見之たり是れなたへ御めん空すお三五夜
 中の月包の豆の鞠寄の場など足るやうにて共
 ある戯吟たりけり

左 昔或時詩人明月に向て佳句を設け余りの

娘にさしに心乱れ高橋に登りて鐘をつきしと、
 かねて浮世は候なりぬ月に村雪花は風といた
 りありの雨白きに梳久い心乱れ青楼に遊
 び金をつめお物狂ひしき身を小共のたみく月
 を惜みて雨かの東かのとては、
 眺めやりて夢の世の中くと観じたりし心
 哀に思ひぬ侍の其上名題のあつかりさむも
 取組ておかしき狂句と云へし何れもさう狂言
 の妙なりき趣向を用へていつくしういふし三
 たる所作意の對の對

(大東京文具チエーン特製)

五香 左持
 出米秋や既か月見ハ
 里いしよこふ之て祝へけふのつす
 少たかなる代に子
 しき風情はかか夫はて、ら女ハニ布一ての哥
 の姿と云ふ又妹が子あまた持ふゆゑ親子
 距離は自家の秋のいとないいつく甲乙もか
 七香 左

箱庭

蟬虫

横笛

象ほや雨ふはねおしけふの月

蛸虫

右勝

名月や名は名物に鳩の湖

少年 涼五郎

左雨に雨施かねおの花と美人に比して彼絶景

を左かめやりたると人の佳吟を心よめて名

高さ月のやりにいかにやあまを翻葉の

一作又鳥有

右月三五のよい差象いかに七

湖湖 上の名月左

(大東京文具チエーン特製)

る一其う一名をいはすして明らかには聞ゆ
ル手柄と云べし一作古風よあふみの名物差象
差象 判者は誰ぢやと言れんしうしうめた
く侍小娘と少年のやさしきこと葉にころひか
して右を勝とす

七番 左勝

化をふなむしなも欠へすけふのつき海虫

右

明月や尻にはきさみし狐の火 捜虫

左清芝をくぬくすてけり小は格か化人とす

木陰の系せ屋やしなしとにや月の明白びやくなるけしき
 さやかに聞へ侍るは月つき全ぜんくたたののききにわたさず
 いかにも中秋ちゅうしゅうの念ねん句くといふし
 右月の明あきらかなるには是こゝの光ひかりは落おちけは狐きつねが
 とほろ甲斐かい在あるよし一句いちくの心こゝろは聞きけ侍まと
 作者そしやの名なを呼よびしや、かゝのたゞふくやうも
 左ひだりうさう狐きつねの声こゑをいはるや二人ふたりなまはは
 所ところへ出でしともあぶらげのない、句くとは申まけた
 し

八番 左勝

(大東文具チエーン特製)

寝ねこくはほろふり来たるとしけあや月つき釘倒くわうたう
 右
 名な月つきや夫婦ふうふのあふらあふらをを待まちたい
 左世ひだりよの言ことををとりあしこゝろ心こゝろ明あらけく月のつき雲くも殿との
 決けつりす聞きへ侍まるすは寝ねて鷹たかの夢ゆめ見みるす
 はと月つきを詠よむ古人こじんもあらしか
 右やとり木の巻まきに独ひとり月つきな足あし玉たまひそよ心をさ
 れはいとくるしと聞きへあさ玉たまひてこわい句くふ
 寛かんの中なか忍しのへの玉たまひあし玉たまひし詞ことば又また對たい月つき明あ
 莫な思し往わう事じ損しん君きみ顔かほ色いろ滅めつ君きみ年ねん是こゝ白はく乐らく天てんか内うちにに贈くわ

たの諒なりとあや
 是寺の心を念て大婦と
 ち后かありあけり月と
 名をふ名香ありとさ
 つ、更行風情の中
 くら思ひて侍の
 一句のこと
 はさだかなうす

九番

左

雲はうて思やく
 無一人けふの月尺蠖

右

盃の蔭待あり
 了り月見かな
 花と虫

左雲無心
 以出の油
 かがや侍小
 と今宵は心
 有けに

乙雲さへ
 むさと
 出の油
 かがや侍小
 と今宵は心
 有けに

(大東京文具チエーン特製)

了る心
 侍小と無心の文字
 おたやかならず
 右月のさやけさ
 芝を請持て山
 何草木と
 うかみ
 溢る、大盃
 たりは突て万鏡
 をうつす鏡の
 こと
 くなる
 一か、る
 けしさいのま
 で日しうか
 め
 事又さ
 けは月の夜花
 のもとに
 盃出し
 たる万
 の雲は
 光あり
 物を下
 戸なりぬ
 こえ
 比句はよ
 けれ

十番

左勝

光満のつすま光んくこけふの月
豎出

顛池しつむしのふか園の月見かな
濕出

左海あ士たの家たに稀まるん侍と彼まるま之

乙ほき風情まとまるまやうこまして改すし月す

ちてんくと更行神の秋のげしきと一句にこ

もりこいとさり誠に鳴の感吟く

右右水を忍ぶか園の月に池の面をなかめや水

か天女の宮井神さびと御火燈との光い波に浮こ指

にうつる月影はすみもたりたる水に沈んこ白

木に登りけしさとて云すこど一句の作今
少能力すく存しとや申さん

十一番 左持

すかれきくすいな翁の月見かな
菊虎

うす差かふらん志すねに月見かふ
兜虫

左折ふしのうつりかはこに目に見取に聞く

にこぞ心は慰むわかなれとも又句ひて不物に

をなつかしさ事ハ多め水さ水心今習名にほ

ふ空の月を詠て更ゆくすかれをきくすいな翁

とあると香の^名存心は心も詞もかろはしくて
 差髪などの長からば董りもやせんといとやか
 し右老の顔に傾く月の影を惜みて更行まゝに
 身よりお風の冷やかと心は空にかしハ辭て
 う寝たう姿や東山のなたらかたのけしきと思
 む出づの侍のさかか一期の樂はうたゝ寐の
 枕の上極ると書し長明の字の跡をなつかし
 て諸事にかまはず蒲團しきねに月久せうるし
 大通差人ありは^{たつ}持なをさなと心も同じ友成べ
 し

(大東京文具チエーン特製)

十二番 左

鏡山外陰とかけ一面にけふの月

石龍子

右勝

うそ岡くう森いり森ハ粟津糸けふの月 蛭 蜒

左に玉句をこそよく沈吟し侍りに三字上

暑の作よし詞よくあひ心明くけさ名月

の市書作よし侍らん但しうさくは市春

紐のけやけさやうに聞侍るを二名みよて物名

よみ入る事ハおほろけにしておほろけ斤

すと ~~地~~ ぬや侍る 芥水は ありあり なるは
 只すくなくもや侍人歟
 右にと葉の 結を ^す ゆうに して心ある 一件と云
 一 ^{よのつね} 尋常日は 明らけき けしさを こそ 頁が 志る
 に引遠へて 更行影しう ためたの 粟津の 森のう
 を 闊い所を 云へ 湖水の 月の 明白なる こそ 一句
 に之えたり

左の 作者は 華く 怖しき 方 芥水は 身の 行末を
 思ひ 了は 世に 句こそ 評に 休閑の 鏡山 天下一の 銘句
 とし 中へ 狂狂と 勝左也 まいらせ たくい 侍れと云

(大東京文具子エーニ特製)

今か、了 句念 の 判者 とう ち たる 一の 心ある
 人 是 正 通 神 の 照 臨 と 恐 あり 芥水は 愚意の まゝ
 とを 中 侍る

十三番

左

杜子美

鉄 斎 の と ^{杜子美} 呼を 思ふ 月 是 外 紙 臭

右勝

名 月 や す けて に 白 け し 東 坡 巾 杖 呼

左の 作者は 書物の中 に出 じ あり こそ 一 句を 懐か
 かりて 学者め かし 博識を 紡ぐ かに 一 号を 借
 出と といふ こと なる さま 小は 彼 杜子美 朋友を 夢みて

名残を惜たす詩に珠月満屋梁猶疑見顔色（見顔色）
 小を合て清負の月を翫ふ心の中の涼しさを云
 んとて玉文字を遣小たるある一実七言打
 のあき庵月見の畫負立いたましく思甘小侍
 右ニ小北日一く字者よ心の趣向はいにしえ
 相違（相違）か名月や陶淵明が既巾の蚊は声色をつか
 むて心の等類をのめ水遠さ森壁の遊（遊）ひを今宵
 の月と思やりて東方既白の比まるとなりぬや
 リたの月見詮決めう今洞へ侍了左の鉄打しの
 吟と引くくして果腹を考るるま巾の位少し言し

（大東京文具子エーニ特製）

と云一

十四番 左勝

無向の鏡 月見の騎

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇

河蛭

右

番牛やあにれ月見の

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇

暮光

左柳鐘の名高きハ声（声）圓（圓）塔（塔）寺（寺）鐘（鐘）日（日）東（東）大（大）寺（寺）形（形）平（平）

寺院といやせと無向の鐘の心とく金の出下

了ためしを聞かすさ小はいまし之名人の路考（路考）

は鐘と撞しとす其声詭（詭）あ忘やう十御答わたり

古今の世道も其名と高し其物をうつして月見の

驕をきけむとの趣向ありて用へ侍り言事
 よく後へ字ありしの一休はたなき
 の古風ありしや世の學なりやはなす
 うした能い句はせまい首尾ありし
 いふ一し
 右番子悟道の十牛の圖は夏の夜は
 の起りけり是者牛の潜己者牛は
 宿直と見えたりさ小は彼頼光朝臣
 のるせし平井保昌の如く去月の雪
 の心しあるが又あは小とい源三位
 入道のむも

(大東京文具チエーン特製)

小木の哥の心はへはて番牛を養
 一句のこことけりおかしくは聞へ
 の声よこを聞所ありを思け侍り

十五番 左

四海皆とむほうねんの月見か赤
 け一句を腹は吐へて考吟し侍り
 秋の信句といふはこれ名月の
 みわたりに影明るけり市代
 せうとよ年の秋の片とぬ
 葉のむむと書し情交回
 満る二千里の外

本でい隠なきけし目筋ありん心度く野ゆた
 かな言外の余情限有きその己しこ水に愚句ちと
 なりべ侍らん、彼蘇東の墓名か云し草舎にハサ
 と交へたの心地とはおろか名高き秋のお月様
 と泥亀とや中さん誠においしの身も知らんと
 僻考の愚判さこそ情蛉大いぬかた羽ねいたく
 やおほすらん中へ一句を侍し出さし思案更
 にはくこそ侍下とて尻ごみしいちく取入りけ
 水に石新子の口一座の判者の断ひりくたが玉
 ふこそ猫あてやあしく思ひ水侍りさりとてし

(大東京文具チエーン特製)

今宵案匠の作詠なくてハけ句合の奇意ありす
 又いとし之の奇合も判者の奇を載り小たの
 例も侍小は是氷に一句を連中もろとて所
 均王しきりなりしやは唯點ふかしをもちたけ
 ゆるさしめ草名月のとりはつし
 たの復返と詠しすて、又もとのくさあふるをい
 りぬ
 安永のはしつちのとのいしやとる
 美月の中一の五日

中煉

中煉

名月や二竹助三すし 塩 煙 言 子

名月や世の音とものに物仕舞 一 馬

名月やめつらき物待つ心 菊 武

名月の丸きけり代の鏡あり 三千丸

玉川や申末侍一し名の月夜 緋 彦 西 外

十五かゝ酒をのみあこと
まじりあして

五十年一酒の秋暮古中月の秋 朝 四

(大東京文具チエーン特製)

飲喰ふて月々ぬ人や腹の虫 月 成

踊しめてた、すまは月々かふ 平 砂

書^ス三五夜^ハ虫^ハ句^ハ合^ハ之後^ニ (二)かき

象^ハ虫^ハ加^ハ俳句^ハ各^ハ其^ハ副^ハに^ハ應^ハし^ハ氣^ハ攪^ハか^ハ評^ハ語^ハよく

その音^ハを^ハ和^ハう^ハく^ハ轉^ハして^ハ戲^ハ場^ハの^ハ雜^ハ劇^ハを^ハ臺^ハ時^ハ始^ハ

のうげ^ハひ^ハあ^ハん^ハこと^ハを^ハよ^ハせ^ハた^ハり^ハ古^ハ雅^ハと^ハ今^ハ

俗^ハより^ハあ^ハり^ハた^ハめ^ハな^ハか^ハり^ハぬ^ハれ^ハよし^ハこれ^ハ轉^ハ失^ハ

氣^ハの^ハ名^ハに^ハ對^ハして^ハの^ハれ^ハ加^ハ怪^ハる^ハを^ハ推^ハあ^ハへ^ハ系^ハ

萬言のちるも足流すべし。たゞ此原の
の囀、君の集より出たれハ其好古の志とほめ
さるんや。殊に月成子^子芝末のまほしくも撰者
の芳き草を介て出る

市隱 解 卷主人

十九六経

正号

山女承八年己亥既卯
東都書林
通早十軒
山崎金吾
新吉原大門
川色三郎
合版

表紙紙巻
題セシ中
大平紙
紙巻
十

(大東京文具チエーン社製)

